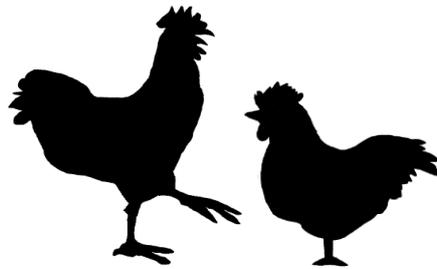


第52回
東海・北陸地区鶏病技術研修会



平成29年11月17日(金)

ウインクあいち(愛知県産業労働センター)

愛知県名古屋市中村区名駅4丁目4-38

鶏病研究会愛知県支部

後援:愛知県

第52回東海・北陸地区鶏病技術研修会次第

- 1 日 時 平成29年11月17日（金）10:00～16:00
- 2 場 所 ウィンクあいち（愛知県産業労働センター）12階1203
愛知県名古屋市中村区名駅4丁目4-38
- 3 日 程
- (1) 開会 10:00
- (2) 挨拶
- (3) 来賓祝辞
- (4) 特別講演 10:20～12:00
演題：「日本発信 アジアのアニマルウェルフェア」
講師：株式会社ハイテム 安田勝彦 先生
- (5) 昼食 12:00～13:00
支部長会議（12階1209） 12:00～12:50
- (6) 技術検討会（一般講演） 13:00～
- ①助言者・座長紹介
〈助言者〉
鶏病研究会 理事 谷村信彦 先生
（(国研)農業・食品産業技術総合研究機構 動物衛生研究所部門）
（一財）日本生物科学研究所 製造部長 林志鋒 先生
（一財）化学及血清療法研究所 動物薬事業本部製造部長 出口和弘 先生
〈座長〉
岐阜県中央家畜保健衛生所 大平雅史 先生
愛知県中央家畜保健衛生所 澤寄裕是 先生
- ②演題発表（7題）
発表10分、質疑応答・助言5分
- (7) 講評及び優秀発表者の表彰
- (8) 閉会 16:00

第52回東海・北陸地区鶏病技術研修会

技術検討会抄録

発 表 演 題

座長：澤寄裕是（愛知県中央家畜保健衛生所）

- 1 系統診療所における7年間のブロイラー診療実績 13:00～13:15
後藤新平（GAF家畜診療所）
- 2 名古屋コーチンの食鳥検査成績の分析と課題 13:15～13:30
伊藤裕和（（公社）愛知県獣医師会食鳥検査センター）
- 3 鶏白血病ウイルスB亜群感染鶏に見られた赤芽球症の一例 13:30～13:45
藤木省志（岐阜県中央家畜保健衛生所）
- 4 シャモ種鶏場でみられた鶏伝染性気管支炎の発生事例 13:45～14:00
斉藤妙子（静岡県中部家畜保健衛生所）

（休 憩）

（14:00～14:15）

座長：大平雅史（岐阜県中央家畜保健衛生所）

- 5 ウズラにおけるニューカッスル病オイルワクチンの接種日齢の検討 14:15～14:30
長谷川恵実香（愛知県農業総合試験場）
- 6 若齢肉用鶏の起立不能を主徴とするウイルス性腱鞘炎／関節炎 14:30～14:45
庄山剛史（三重県北勢家畜保健衛生所）
- 7 採卵鶏幼雛のロイコチトゾーン病発生事例について 14:45～15:00
近藤道代（愛知県西部家畜保健衛生所）

1 系統診療所における7年間のブロイラー診療実績

ゴトウシンペイ
○後藤新平 (GAF 家畜診療所)

【はじめに】

GAF 家畜診療所は、2010年にG食鳥処理場内の新施設に移転開設し、系統のブロイラー農場を中心に診療および衛生指導に携わっている。開設後7年を経過し、年度ごとの診療件数をまとめるとともに、疾病等の動向について検討したので、その概要を報告する。

【材料および方法】

対象農場は、直営農場が3農場、委託農場が4農場、契約農場が4農場の合計11農場で、契約2農場は三重県内に、他の9農場は岐阜県内に所在する。いずれの農場も抗生物質、抗菌剤および抗原虫剤は、全飼育期間を通して全く使用していない。

7年間（2010～2016年度）の診療件数を、疾病および項目別に集計し、比較検討した。

【結果および考察】

7年間の診療件数は532件（2010年度：72件、2011年度：120件、2012年度：41件、2013年度：81件、2014年度：66件、2015年度：82件、2016年度：70件）で、疾病別では大腸菌症が112件(21.1%)、骨脆弱症が94件(17.7%)、コクシジウム症が49件(9.2%)、アデノウイルス感染症が41件(7.7%)、壊死性腸炎が29件(5.5%)、腹水症が27件(5.1%)、ブドウ球菌症が7件(1.3%)、レオウイルス感染症が4件(0.8%)で、管理失宜では熱中症が143件(26.9%)、寒冷死が44件(8.3%)、圧死が53件(10.0%)であった。その他、鳥インフルエンザ検査が323件ですべて陰性であった。また、鶏大腸菌症生ワクチンの接種指導が117件、コクシジウムワクチン接種が55件で、ワクチン接種農場においては、両疾病の発生の減少が図られた。食鳥処理場での検査は80件で、主に生鳥プラットホームにおける積み置き籠内での熱死であった。

特筆すべき事項としては、2015年度のマイコプラズマ症の発生、2013・2015年度の鶏舎火災、2011年度の集中豪雨による水害、2013年度のSQF認証（直営農場）があげられる。

鶏の改良がすすみ、増体は良くなったものの、食鳥処理場では、浅胸筋変性症（木質化）の増加による胸肉の廃棄が問題提起されている。

2 名古屋コーチンの食鳥検査成績の分析と課題

○伊藤裕和^{イトウヒロカズ}（(公社) 愛知県獣医師会食鳥検査センター）・
小松徹也（愛知県中央家畜保健衛生所）

地鶏は一般のブロイラーに比べ鶏種や飼育条件（期間や密度等）が異なり、生産羽数はブロイラーの約1%である。そこで、今回、名古屋コーチン（名古屋種）の食鳥検査成績を分析しブロイラーと比較したところ、若干の知見が得られたので、その概要を報告する。

【材料および方法】 2016年4月から2017年7月まで125日齢前後で県内の7農場から出荷された約46万羽（115鶏群）の名古屋コーチンの食鳥検査を実施した。各鶏群の廃棄率（(とさつ・内臓摘出禁止＋全部廃棄)÷検査羽数×100%）を求めた。①農場で喧噪性に起因する被害がみられ廃棄率の高かった14鶏群の事例では、創傷性皮膚炎や外傷のみられた廃棄鶏120例の肉眼検査を実施した。細菌検査は20例の主要臓器および異常のみられた皮膚や損傷筋肉部を好気性培養し、病理検査は3例の主要臓器、腸管、異常のみられた皮膚および筋肉をHE染色とグラム染色を行い観察した。②卵管炎の事例では、細菌検査は廃棄鶏4例を好気性培養（主要臓器と卵管内容物）し、病理検査は主要臓器や卵管等をHE染色とグラム染色を実施した。③肉眼検査で趾蹠皮膚炎の有無を7農場について確認した。

【結果】 115鶏群の平均廃棄率は0.43%で、主な内訳は削そう・発育不良(61%)、炎症(24%)、外傷(10%)であった。①喧噪性に起因した廃棄割合は廃棄の34%を占め、内訳別では削そう等の18%、炎症の62%、外傷の83%を占めた。鶏群毎の廃棄率では喧噪性有りは1.64%、無しの鶏群は0.31%で両者間に1%水準で有意差がみられた。肉眼検査では削そうと、炎症（背部等の創傷性皮膚炎）や外傷（筋肉の損傷等）がみられたが、主要臓器に異常はみられなかった。細菌検査では主要臓器から有意な菌は分離されなかったが、創傷部位からは様々なグラム陽性および陰性菌が分離された。病理検査では外傷部表皮には細菌付着や偽好酸球浸潤等が、真皮には血栓形成や周囲には偽好酸球の浸潤が観察され、グラム陰性や陽性菌が確認された。筋肉までは偽好酸球浸潤や細菌は確認されず、化膿性皮膚炎と診断された。②卵管炎の事例での廃棄割合は炎症の26%を占め、左卵管は腫大していたが、主要臓器には異常はみられなかった。卵管内容物から大腸菌が有意に分離されたが、主要臓器から分離されなかった。病理検査では卵管壁は高度に壊死し線維素の析出等がみられたが、肝被膜炎や心外膜炎はみられなかった。③7農場とも趾蹠皮膚炎は確認されなかった。

【考察】 2015年度の全国のブロイラーの廃棄率は1.30%で、大腸菌症、削そう等、腹水症が主な内訳であった。今回、亜急性漿膜炎型の大腸菌症はみられず、廃棄の原因が異なり、鶏種や飼育条件の違いによるものと考えられた。①喧噪性の事例では、農場内で何らかの刺激（光や音等）に反応し、鶏群が喧噪性を示した結果、化膿性（創傷性）皮膚炎等が起こったと思われた。②卵管炎の事例は、心膜炎や肝被膜炎はみられず、腫大した卵管内容物から大腸菌が分離されたことから、総排泄腔から大腸菌が上行感染した卵管炎と診断された。③趾蹠皮膚炎では、地鶏は飼育密度が低いことから、敷料の含水率も低く発生がなかったと考えられた。名古屋コーチンは日本のブランド鶏肉で、最近では海外にも輸出されている。今後も、農場等を含めた事業所に食鳥検査成績をフィードバックし、関係者と生産性阻害要因に対処し、生産性の向上と安全で高品質な鶏肉の提供に努めたい。

3 鶏白血病ウイルス B 亜群感染鶏に見られた赤芽球症の一例

フジキセイジ
○藤木省志・太平雅史（岐阜県中央家畜保健衛生所）

【はじめに】鶏白血病ウイルス（ALV）はレトロウイルス科に属するウイルスで、Bリンパ球に由来するリンパ球性白血病はじめ様々な腫瘍を引き起こす。その他にも赤芽球症やその他の白血病、肉腫や結合組織性腫瘍を引き起こす。鶏に感染する ALV には A～E 亜群及び J 亜群の 6 群に分類され、このうち E 亜群は鶏の内在性ウイルスであり、腫瘍原性はなくその他の群は腫瘍原性がある。赤芽球症は、骨髄の赤血球系細胞が腫瘍化し末梢血中に出現するもので、赤芽球性白血病とも呼ばれる。野外での発生は非常にまれな腫瘍であり、今回 ALV-B 亜群感染鶏において本病に遭遇したので概要を報告する。

【発生状況】2016 年 2 月 2 日、約 30,000 羽を飼養する肉用鶏農場で 78 日齢の鶏群について畜主が当日朝の死亡鶏を確認し解剖したところ、臓器の腫大を認め、マレック病（MD）を疑うということで病性鑑定の依頼があった。当該鶏群には 1 日齢で MD ワクチンを接種していた。

【材料と方法】死亡鶏の体腔内臓器を用いて病理組織検査として H E 染色、C D 3 免疫染色を実施した。ウイルス検査として遺伝子検査（MDV、ALV）及びウイルス分離（鶏線維芽細胞）を実施した。肉眼的に肝臓は赤みを帯びて腫大し、脾臓にも腫大が見られた。

【結果】病理組織検査では肝臓において、類洞内に血球系細胞の腫瘍性増殖が認められた。腫瘍細胞によって類洞は拡張し、肝細胞は圧排され変性していたことに加えてクッパー細胞の活性化が認められた。腫瘍細胞は、細胞同士の境界明瞭で、やや大型であり、核は円形で淡明、好酸性の明瞭な核小体を持ち、細胞質は好塩基性であり、核周囲にハローを有し、核分裂像も散見された。免疫組織化学的検査の結果、腫瘍細胞は CD3 陰性を示した。他臓器においても腫瘍細胞は血管内に限局して認められ、特に脾臓の赤脾髄で顕著だった。透過型電子顕微鏡による観察では、腫瘍細胞は大きく明瞭な核小体を有し、細胞質に顆粒状の遊離リボソームを豊富に認められ、核周囲にミトコンドリアが配列していた。ウイルス検査の結果、肝臓より腫瘍原性のある ALV-B 亜群特異遺伝子が検出され、MDV 特異遺伝子は陰性だった。また鶏線維芽細胞に肝臓乳剤を接種培養し、レトロウイルスを分離した。

【まとめ】鶏における血球系腫瘍細胞の起源を特定することは難しいが、今回の腫瘍細胞の増殖様式や形態的特徴は、赤芽球症に一致した。また、ウイルス検査において ALV-B 亜群が検出されており、その関与が疑われた。以上より、本例を ALV-B 亜群感染鶏に見られた赤芽球症と診断した。野外での赤芽球症の発生は非常にまれな腫瘍であり、今後も症例データの蓄積が必要と考えられた。

4 シャモ種鶏場でみられた鶏伝染性気管支炎の発生事例

○^{サイトウトタモコ}芥藤妙子・金森健太（静岡県中部家畜保健衛生所）

【発生概要】平成29年3月21日、県内のシャモ種鶏場（11鶏舎、約1900羽飼養で、採卵鶏も含む）の1号鶏舎（シャモ、428日齢、351羽）で異常呼吸音、産卵率の低下、沈うつ等の症状が認められ、病性鑑定を実施した。その後、同年4月3日に、2号鶏舎（コシャモ、325日齢、185羽）でも沈うつ、死亡羽数の増加が認められ、追加で病性鑑定を実施した。その後は、農場全体で産卵率の低下を確認した。なお、本農場は14、28、91日齢で鶏伝染性気管支炎ウイルス（IBV）練馬株の生ワクチン、112日齢で練馬株、TM-86株の混合不活化ワクチンを接種していた。

【材料と方法】シャモ3羽及びコシャモ3羽について、次のとおり病性鑑定を実施した。

（1）剖検及び病理組織学的検査（2）ウイルス学的検査：鳥インフルエンザ（AI）簡易キット、遺伝子検査（IBV、ニューカッスル病ウイルス、鶏伝染性喉頭気管炎ウイルス、鶏痘ウイルス）、ウイルス分離（発育鶏卵尿膜腔内接種）（3）細菌学的検査：血液寒天培地及びDHL培地でCO₂培養。

【結果】（1）シャモは剖検で著変は無かったが、組織では主に気管支粘膜固有層のリンパ球及び偽好酸球の浸潤を確認した。コシャモは剖検で腎臓の退色が見られ、組織では腎臓で尿細管の変性及び壊死、間質のリンパ球及びマクロファージ等の浸潤、尿細管腔内に球状結晶物の貯留を認めた。（2）AI簡易キット全羽陰性、シャモは気管及び肺乳剤から、コシャモは気管、肺、腎臓乳剤からIBV特異遺伝子を検出し、IBVが分離された。（3）有意菌は分離されなかった。

分離されたIBVについて、S1蛋白領域の塩基配列解析を実施したところ、遺伝子型はJP-Iに分類され、シャモ由来株とコシャモ由来株は99%以上の相同性を確認した。また、血清型別試験（練馬、TM-86、C78、AK01株の各抗血清に対する片交差中和試験）では、全ての抗血清に中和反応性を示し、血清型は不明であった。

発生前後の血清を用いたIBVの抗体検査（練馬、TM-86、C78、AK01株を用いた中和交差試験）では、発生前後で全ての株に対して抗体価の上昇を確認した。

【考察】本症例は鶏伝染性気管支炎と診断。他の鶏舎もIBVがまん延し、産卵率の低下が起きたと推察された。シャモは呼吸器症状、コシャモは腎炎症状が見られたが、発症時期や塩基配列解析結果から、侵入した株は同一と考えられ、発生時は気温差が激しく、コシャモは気温差を受けやすい鶏舎で腎炎を発症、死亡率が高くなったと考えられ、今後の発生防止には鶏舎内温度管理が重要と思われた。また、抗体検査及び分離株の血清型別試験結果から、現行のワクチンでも、ある程度効果があったと考えられたが、ワクチンプログラムには現行の株に加え、分離株と同じ遺伝子型JP-I型の株及び、血清型別試験で交差性のあったAK01株も属する遺伝子型JP-III型の株も幅広く入れるよう指導した。ワクチンの選択には、分離株の血清型の把握が重要だが、試験方法の簡便さから遺伝子型で判断することが多い。今回のように血清型と遺伝子型が一致しないことがあり、分離株の血清反応性を確認する重要性を再認識した。

5 ウズラにおけるニューカッスル病オイルワクチンの接種日齢の検討

ハセガワエミカ
○長谷川恵実香(愛知県農業総合試験場)、美濃口直和(愛知県東部家畜保健衛生所)・
吉岡理恵(愛知県畜産総合センター種鶏場)

1. 背景と目的

ニューカッスル病(ND)は、家きんの疾病のなかで、伝染性や病原性の非常に高いウイルスによる伝染病であるが、ウズラを対象としたNDワクチンは、現状では製造されておらず、鶏用のワクチンを利用した予防が行われている。主なNDワクチンには、筋肉内接種によるオイルワクチンとスプレー噴霧により接種する生ワクチンがある。オイルワクチンは、ワクチン効果の長い持続時間が得られる反面、接種ストレスが強いことが予想され、早いもので35日齢前後に産卵を開始するウズラでは初期産卵や増体への影響が懸念される。吉岡は、NDオイルワクチン0.1ml/羽を35日齢で接種したところ、生ワクチンスプレー噴霧のみの場合との比較において、生涯生産性は低下しないものの、産卵開始が1日程度遅延したとしている。そこで本研究では、ウズラの産卵開始時期を考慮し、ワクチン早期接種によるストレス軽減の可能性を検討するため、オイルワクチン接種量0.1ml/羽で、ワクチン接種日齢を28日齢に早め、生産性及び抗体価を検討した。

2. 材料及び方法

供試ウズラは、2015年10月餌付けのニホンウズラ(BC系統)270羽で、試験期間は5週齢(2015年11月)から48週齢(2016年9月)までとした。試験区は、(1)28日齢接種区{2週齢(Sp:生ワクチン噴霧)、4週齢(Sp)、28日齢(0.1ml10E:オイルワクチン0.1ml胸部筋肉内接種)}、(2)35日齢接種区{2週齢(Sp)、4週齢(Sp)、35日齢(0.1ml10E)}、(3)オイルワクチン無処置区{2週齢(Sp)、4週齢(Sp)}の3区とした。なお、試験区は各区30羽の3反復とした。調査項目は、臨床観察、体重(5~10週齢)、飼料摂取量(5~48週齢)、産卵率(50%産卵~48週齢)、赤血球凝集抑制反応(HI)抗体価(6、8、11、25及び48週齢)とした。

3. 結果と考察

臨床症状は、28日齢接種区では、オイルワクチン接種後に沈鬱症状を呈する個体は認められなかった。一方、35日齢接種区では、接種3時間後に全体の約9%(8羽/30羽×3反復)で若干の沈鬱症状が認められた。NDHI抗体価は、28日齢接種区及び35日齢接種区いずれも、48週齢まで90%以上の個体が5倍以上の抗体価を維持した。50%産卵日齢、飼料摂取量及び体重の推移は各区间で有意な差は認められなかったが、産卵率については、28日齢接種区がオイルワクチン無処置区に比べて有意に高かった。

NDオイルワクチンの28日齢接種区は、ワクチン接種後に沈鬱症状を示す個体が見られず、産卵率も高く推移したことから、安全性が高く、生産性を低下させる危険性がより小さい接種法であることが示唆された。

6 若齢肉用鶏の起立不能を主徴とするウイルス性腱鞘炎／関節炎

ショウヤマタケシ
○庄山剛史（三重県北勢家畜保健衛生所）・下田智彦（中央家畜保健衛生所）

平成 28 年 10 月、肉用鶏 2 農場において若齢の 3 群（入雛羽数それぞれ 9,270、8,034、13,493 羽）の白系肉用鶏に、起立不能、開脚、歩様異常を呈する疾病の発生がみられた。各群の死亡・淘汰のピークはそれぞれ 6、7、4 週齢にみられた。3 群の育成率はそれぞれ 93、94、94%、日増体重(DG)は 50.0、55.9、53.9g/日と成績不良であった。

24 日齢、32～33 日齢、36 日齢の発症鶏 17 羽が、定法により病理解剖検査、病理組織検査に供された。このうち 13 羽について、足関節の腱乳剤を用いてトリレオウイルス (ARV) の特異遺伝子を検出する RT-PCR が行われた。足関節の腱乳剤が発育鶏卵漿尿膜上に接種され (3 代継代)、その漿尿膜乳剤を用いて RT-PCR が行われた。足関節から分離された ARV と一般に健康鶏が保有しているとされる ARV との遺伝学的な相違を確認する目的で、足関節の腱乳剤の採取された 13 羽のうち 3 羽の腸管乳剤を材料として、発育鶏卵漿尿膜上接種 (3 代継代) 及び RT-PCR が行われた。10 羽の足関節の滲出液を材料として、血液寒天培地、Frey の液体培地を用いて細菌分離検査、*Mycoplasma gallisepticum*(Mg)、*Mycoplasma synoviae*(Ms) の特異遺伝子を検出する PCR が行われた。

肉眼的に足関節部の浮腫、腓腹筋腱や趾屈筋腱の腱鞘の水腫性肥厚、軽度癒着がみられた。病理組織学的に腓腹筋腱や趾屈筋腱の腱鞘の滑膜細胞の増生や線維素滲出を伴う非化膿性腱鞘炎、心臓の心筋線維間の偽好酸球の浸潤がみられた。

ウイルス学的検査が行われた 13 羽全てにおいて、発育鶏卵の漿尿膜から ARV 特異遺伝子が検出された。このうち 10 羽では足関節の乳剤を直接用いた RT-PCR でも ARV 特異遺伝子が検出された。足関節の細菌分離検査では 1 羽から大腸菌が分離され、Mg、Ms の PCR は陰性であった。以上の結果からウイルス性腱鞘炎／関節炎と診断された。なお腸管内容を材料とした ARV の分離検査は 3 羽とも分離陰性であった。

発生鶏群は約 50 日齢で出荷されたが、2.5、2.6、6.2% が食鳥検査により全部廃棄となった。育成率、DG とともに低く、3 群あわせた本病による被害金額は 225 万円余りと算定された。

農場主に対して、種鶏群に L+K 方式によるワクチネーションを行うよう指導した。本ウイルスは健康鶏が広く保有しているとされ、検査結果の解釈は難しい。解剖検査に当たっては足関節だけでなく中足部も慎重に観察する必要がある。分離された ARV の病原性を確認することが望ましいとされるが、それができない場合、ウイルス学的検査を慎重に行い、類似疾病の否定、心筋線維間における偽好酸球の浸潤の確認や種鶏へのワクチネーションなど多角的に検討して診断する必要がある。

7 採卵鶏幼雛のロイコチトゾーン病発生事例について

コンドウマサヨ
○近藤道代・竹内康江（愛知県西部家畜保健衛生所）

ロイコチトゾーン病はニワトリヌカカによって媒介される *Leucocytozoon caulleryi* の感染により発生する原虫病で、産卵鶏での発生が多いと言われている。平成28年度に幼雛でのロイコチトゾーン病の発生があり、合わせて管内の浸潤状況を調査したためその概要を報告する。

【発生状況】成鶏6万羽、育成鶏1万羽を飼育し、年4回（2、5、8、11月）初生導入している採卵養鶏場から、平成28年9月2日から5日にかけて、幼雛舎において8月17日餌付けの雛（1鶏群1万羽）で1日約15羽ずつ死亡したとの連絡があり、9月5日及び7日に病性鑑定を実施した。この時、他の鶏（成鶏6鶏群、合計6万羽）には異常は認められなかった。

【材料及び方法】生存雛10羽、死亡雛12羽を病性鑑定材料とし、剖検、血液検査、病理組織学的検査、細菌学的検査及びウイルス学的検査を実施した。また、ロイコチトゾーン病の浸潤状況を調査するため、同年10月から12月に発生農場及び管内の開放式鶏舎で飼養している採卵養鶏場（無作為抽出した4農場、8鶏群、58羽）で抗体検査を実施した。

【結果】剖検において腎臓および脾臓の腫大、胸筋の点状出血が共通して認められ、死亡雛では内腔の出血が見られた。ヘマトクリット値は15～20%で、血液塗抹で赤血球中にロイコチトゾーンメロゾイトが確認された。病理組織学的検査では各種臓器や消化管にシズントが見られ、周囲には異物巨細胞の浸潤が観察された。細菌学的検査では有意な菌は分離されなかった。また、ウイルス学的検査でIBV及びIBDV遺伝子は検出されなかった。以上の結果からロイコチトゾーン病と診断した。

浸潤状況調査について、発生農場では今回発症した鶏群及び平成28年4月餌付け、平成27年8月餌付けの鶏群で高い抗体陽性率（40～70%）を示したが、夏期に幼雛舎で飼養されていない鶏群の陽性率は低かった（0～10%）。また、発生農場以外の採卵養鶏場では、4農場中3農場で抗体が検出された。

【対策及び考察】発生鶏群については、抗菌剤（スルファモノメトキシシム・オルメトプリム合剤）の飲水投与を9月8日から開始するとともに、ニワトリヌカカ対策として幼雛舎内への殺虫剤散布を行ったところ、9月9日以降の死亡羽数は漸減した。平成29年も同様の被害が懸念されたため、鶏舎内外への殺虫剤散布並びに計画的な抗菌剤の投与を指導した。その結果、今夏のロイコチトゾーン病を疑う死亡例は認められていない。

発生農場周辺は水田や藪が多くニワトリヌカカの生育に適した環境となっており、平成27年9月にも同様な死亡例がみられたとのことから、ニワトリヌカカの発生時期と、感受性の高い若齢の雛が幼雛舎で飼養される時期が重なったことにより本病が発生したと考えられた。また、発生農場以外の採卵養鶏場での抗体保有状況からロイコチトゾーン原虫が広く浸潤していると推測されたため、今後も本病の発生防止に努めていきたい。